

おいしいものを食べて世界の子どもに給食を



[TABLE FOR TWO]

2007年に日本から始まったTABLE FOR TWOは、「世界の人口70億人のうち、10億人

が貧困にあえぐ一方で、20億人が食べ過ぎている」という不均衡の解消を目指している。協賛するレストランやカフェ、社員食堂、学食などで参加メニューを1食選ぶごとに、アフリカやアジアの国の給食1食分が寄付される。これまでに集まった支援は3,400万食分を超え、現在は世界14カ国で展開されている。

食堂の枠を超えてスーパーやコンビニなどにも広がっており、西友では今年4月からカロリー低めのお惣菜を買って寄付ができる「カロリーオフセットプログラム」を開始して好評だ。

また、毎年10月16日の国連世界食料デーにあわせて、「100万人のいただきます!」キャンペーンを開催している。2015年のテーマは「おに

ぎり」。おにぎりを食べる写真を投稿する特設サイトのほか、さまざまな企業が協賛キャンペーンを展開する。

「自分のための健康な食事や運動が、世界の子どもたちに食事として届くのが特長です」と話す、TABLE FOR TWOの大宮千絵さん。思い立ったら、今日の食事を世界と分け合うことから始めてみよう。



日本での食事を、給食としてアフリカやアジアの子どもたちと分け合う

TABLE FOR TWO HP: <http://jp.tablefor2.org/index.html>
「100万人のいただきます!」キャンペーンサイト: <http://jp.tablefor2.org/campaign/onigiri/>

走ってつなげる子ども支援の輪



[PARACUP ~世界の子どもたちに贈るRUN~]

ホノルルマラソンに参加して走る楽しみを知った仲間が、ファンドレイジングの一環として2005

年に始めた大会。今では約20団体の共催で、5,000人以上が集まる一大イベントになった。代表理事の森村ゆきさんは、「誰かのために走ることを、世界に目を向けるきっかけにしてほしい」と語る。

当日はハーフマラソンから子ども向けのキッズランや親子ランまで、幅広い種目が開催されるほか、リラクゼーションやフード、共催団体の活動紹介ブースを設置するなど、ちょっとしたお祭りの雰囲気だ。運営ボランティアとしての参加も可能で、ランナーとボランティアに分かれて参加する家族もいる。

「自分の小さな楽しみが、人の役に立つと感じてもらえたら」という森村さん。この大会で支援

するフィリピンの孤児院からは、毎年、参加賞の手作り首飾りが届く。「子どもたちには多くの人自分たちを応援していることを、ランナーには困難な状況で頑張っている子どもたちがいることを知ってほしい」という。支援が10年を超え、この大会からの支援で大学に入学する人も出てきた。小さな一歩も、積み重ねれば大きな輪になる。



ランナーと運営ボランティアと一緒に大会を作る。参加賞は支援先の手作りだ

PARACUP 2016 (2016年4月)の参加者は11月ごろから募集開始。
詳しい情報はHP (<http://www.paracup.info/>)、Facebookページ (<https://www.facebook.com/PARACUP>)などを参照。

身に着けるものだから人に優しい宝石を



[エシカルジュエリー EARTHRISE]

「例えば、ダイヤモンド以外の全ての宝石が取れるスリランカ。鉱山では児童労働こそ禁止さ

れています。安全への配慮が不足していて、坑道の事故でけがをしたり、亡くなったりする人が後を絶ちません」。EARTHRISE代表取締役の小幡星子さんは、宝石や貴金属の採掘を取り巻く厳しい状況を、そう話す。

現状を変えるために始めた同社は、労働者の安全を考えてきちんと給与を払う鉱山主と直接契約し、宝石を仕入れている。台座となる金などの貴金属も、労働者への適切な給与に加え、採掘や精錬で環境を汚染していないことが保障された、フェアマインド(適正な採掘)認証のものを使っている。

祖母がずっと身に着けていた形見の指輪を母から受け取ったとき、ジュエリーにはその人の

人生が宿ると感じたという小幡さん。「目の前にあるものがどうやって作られたのか、考えてみてほしい」と言う。

普段使いのアクセサリーのほか、国内の熟練職人が作るブライダル用のオーダーメイドジュエリーも人気だ。常に身に着ける大切なものだからこそ、生産国の人を思う気持ちを込めて選んでみては。



産出国の職人の労働環境を尊重し、より品質の高いジュエリーに

EARTHRISE 表参道本店 東京都渋谷区神宮前4-3-18 1F
営業時間: 金曜日~月曜日12:00~19:30 HP: <http://www.earthrise-j.com/index.html>



フェアトレードタウンをつくろう!

特集 グローバル人材 世界と手をつなごう

グローバルの力が生活につながる場所身近にもたくさんある。日常に関わる国際協力の糸口をご紹介します。

毎日の生活が世界とつながる!



世界は遠い。つながるなんて難しい。そう思っている人もいるかもしれない。でも、あなたの住む町そのものが、世界とつながっているとしたら?

フェアトレードタウンは、開発途上国の人たちを支援したいと思う個人だけでなく、企業や商店、大学、学校、行政などが一体となって、まちぐるみでフェアトレード(FT)を推進する都市のことだ。2000年にイギリスで始まったこの活動は、現在ではロンドンやパリ、ローマなどを含む世界23カ国、1,700都市に広がっている。日本では2011年に熊本市が最初の認定を受け、今年9月19日には名古屋市が国内二番目のフェアトレードタウンとなった。

フェアトレードタウンの条件には、市内でフェアトレードの認知度が高く、FT商品を扱うショップの数が増えていることなどのほか、地域の経済・社会活動や障がい者支援などの連携がある。途上国の人たちと適切な価格で取引するだけでなく、地域の産業やコミュニティを活性化することも求められているのだ。

フェアトレードタウンなごや推進委員会の原田さとみ代表は、「長年にわたる草の根のフェアトレード推進活動に加えて、生物多様性条約

第10回締約国会議(COP10)などが開催されたことで、名古屋でのフェアトレードの認知度は4割近くまで上がっていました。今年3月10日に名古屋市議会がフェアトレード支持の議決を満場一致で採択したことで、ようやく認定の条件が整いました。認定を得たこれからは、町の在り方や地域の商店・産業と向き合う新たな始まりです」と語る。

名古屋でのFT活動は「地域と世界、今と未来をつなぐ“地球とのフェアトレード”」を大きなテーマとしている。これは世界のフェアトレードタウン運動の主流になりつつあるビッグテント・アプローチを反映したもので、大きなテントのように、さまざまな面で活動する団体や組織が連携し、フェアトレードの多彩な在り方を幅広く取り込んで相乗効果をもたらすのが狙いだ。原田さんは「フェアトレードタウンになったことを契機に、名古屋と世界のつながりを見つめ直すだけでなく、地域の絆を深め、FT活動を通じた国内・国外との交流の促進や、町の賑わい創出につなげたい」と強調する。町と世界とのつながりは、町の中での人と人のつながりを見直す機会にもなりそうだ。



フェアトレードの認知が高まることと、地域社会のつながりが深まること。フェアトレードタウンには、その両方が必要だ